

# 原住民の視点から台湾の近現代史を 照射する斬新な試み

堀井 弘一郎



四六判 354頁  
集広舎  
[本体 2,750円 + 税]

菊池一隆著  
台湾北部  
タイヤル族から  
見た近現代史

## 本書の問題意識

タイヤル族とは主に台湾の南北に連なる中央山脈部に住む原住民族のうちの一つである。原住民族は日本の植民地支配期はタイヤル族を含めて七種族であった。今日ではタイヤル族からタロコ族、セデック族が分離、認定されているが、それらをも包括した総称として本書では「タイヤル族」を使っている。一九三七年の時点でその人口は三万六千人ほどであった。

台湾原住民に関しては、植民地統治の時代から主に民族学、人類学、社会学等の立場から、身体、家族、婚姻、宗教、習俗、言語などの分野で豊富な研究蓄積がある。戦後もそれらの膨大な資料・データをも利用しながら研究は継続されてきた。しかし、歴史学からのアプローチは充分とはいえず、特

に対日抵抗については、中部タイヤル族の居住区で起こった霧社事件等を除けば必ずしも充分ではなかった。

そうした中、著者の関心は「平埔族のように「近代化」を受け入れた民族ではなく、それを頑強に拒絶し、対清・対日抵抗を続け、最も「野蛮」と称され、台湾原住民の中で影響力の強かったタイヤル族」に向いた。特に指導的立場にあつた台湾北部の桃園県角板山（現在の桃園県復興郷）タイヤル族について、植民地の時代から一九五〇年代までを主要な射程として、歴史学の立場からその全貌を俯瞰しようとしたのが本書である。北部タイヤル族に的を絞ったのは、「研究が蓄積しつつある中部タイヤル族（現在のセデック族を含む）に対して、台湾史研究でも空白ともいえる北部タイヤル族の解明が急務」で、それなくして「原住民の体系的かつ全面的解明

は不可能、「台湾の対日抵抗史全体を構築できない」とする問題意識からである。本書は、「分断された歴史学と民族学、人類学などを結びつけることにチャレンジし、新たな学問的地平を切り開くことをめざす」という著者の狙いが込められた労作である。

## 本書の構成

本書の構成は以下のとおりである(各章とも「はじめに」と「おわりに」は省略した)。

### プロローグ 抵抗・苦難・尊厳

#### 第一章 台湾タイヤル族の伝統生活と戦闘組織について

一 タイヤル族の神話伝説・居住空間・伝統生活 二  
タイヤル族の組織機構とガガ(Gaga) 三 タイヤル族  
の戦闘 四 蕃刀と入れ墨 五 治療・呪術・信仰・禁忌

#### 第二章 台湾北部における日本討伐隊とタイヤル族――

##### 対日抵抗と「帰順」

一 問題への導入 台湾北部角板山タイヤル族へのイン  
タビュー 二 「土匪」の対日抵抗 三 日本当局の原  
住民政策とタイヤル族の対日抵抗 四 日本討伐隊と  
タイヤル族の戦闘実態 五 岸不朽の従軍記 六 タイ  
ヤル族の「帰順」・投降

#### 第三章 日本・台湾総督府の理蕃政策と角板山タイヤル族

一 台湾原住民「高砂族」について 二 理蕃政策の実  
態と特質 三 日本植民地統治と原住民の「自治制度」

#### 四 原住民教育とその特質 五 観光・映画と「啓蒙」

#### 第四章 高砂義勇隊の実態と南洋戦場――台湾原住民から見るアジア・太平洋戦争、そして国共内戦

一 高砂義勇隊の成立と背景 志願兵制度、徴兵制と関  
連させて 二 銃後の台湾原住民 三 南洋戦場での  
激戦と高砂義勇隊 四 南洋戦場の実相と日本敗戦病

#### 魔と飢餓・「人肉食」 五 日本敗戦後の元高砂義勇隊

#### 員 六 国共内戦に国民政府軍の一員として参戦

#### 第五章 一九五〇年代国民党政権下での台湾「白色テロ」と

#### 原住民――角板山タイヤル族ロシン・ワタンの戦中・戦後

一 日本植民地時代のロシン・ワタン 二 日本敗  
戦と中華民国「光復」初期のロシン・ワタン 三  
一九五〇年代台湾「白色テロ」の背景と特色 四 台

湾における共産党の動態と原住民 五 「白色テロ」  
下の角板山と阿里山 六 高一生と林昭明 七 ロシ

ン・ワタンらの入獄・処刑後の家族 林茂成を中心に  
エピソード

## 各章の内容

第一章では、民族学、人類学等の成果を踏まえつつ、タイヤル族の伝統生活についてオーラルヒストリーの手法をも用いて、軍事的機能を重視した新たな視点から再構成を試みている。すなわち、タイヤル族の組織機構、社会経済制度、家族制度、「出草」（誠首）、祭祀などを考察しつつ、タイヤル社会は「ガガ（Gaga）」という一種の信仰による祭祀団体を中核とする政治・経済・社会・軍事各機構構造として一つの完結する体系であったと新たな視点を提起している。

第二章では、一次資料が限定される中、角板山でのインタビュー記録や文献史料などを用いて、一九二〇年頃までの北部タイヤル族の対日武力抵抗、及び「帰順」に至る経緯が詳述される。武力攻防のみならず、それに介在する漢人「匪賊」、タイヤル側にいた日本人の動向、タイヤル族内部の抗争など、複雑な戦場の状況がリアルに活写されている。また、「以蕃治蕃」、「飴と鞭」の政策によって、北部タイヤル族が武力抗争から植民地内での「原住民の生存権確立、地位向上を求める闘争に大転換した」事情や背景が具体的に展開されていて興味深い。

第三章では、一九二〇年代以降の時期、とりわけ戦時期（一九三七〜四五年）を中心に、「授産」、交易や資源開発、医療・

衛生、「自治制度」、教育、観光・映画、皇民化政策など、理蕃政策の具体的な内容が詳述されている。台湾北部原住民が、日本側の政策への対応を余儀なくされ、「知らず知らずに日本の国策にのみこまれ」、銃を奪われ、狩猟民から農耕民への大転換を迫られていった経緯とその背景の叙述は明晰である。

第四章では、高砂義勇隊や陸海軍志願兵について、従来の豊富な研究、多くの証言集やルポルタージュなども生かしつつ、その実態、役割、歴史的 position、積極的に応募するまでにいたる心理的プロセスなど、その本質に迫る考察を行っている。彼らの多くが南方等の激戦地で過酷な体験をし、戦後は「日本人ではない」として日本側から疎外され、国民党政府の側からも「日本軍協力者」の烙印を押された。一部の原住民は国民党軍側に組みこまれて国共内戦に動員され、そこで捕虜となった後、今後は朝鮮戦争に投入された。さらに文革時には「旧日本軍閥残存分子」などとして糾弾されるなど、日・中・台が絡み合う近現代史の激動に翻弄され続けた事実が突きつけられる。

第五章では、これまで本格的な研究がほとんどなかった二二八事件後の「白色テロ」について、台湾の檔案館資料、中国・台湾・日本国内での諸研究、それに自らのインタビュー記録をも活用しながら、その状況を詳細かつ克明に描く。そ

の際、北部タイヤル族の一部落である大豹社の「頭目」の息子ロシン・ワタンやその子らの生涯を丹念に辿りつつ、原住民、特に角板山タイヤル族と阿里山ツォウ族の視点から見た五〇年代史を整理し、さらに補償問題など現代にも通じる諸問題を論じている。戦後彼らは「体制内改革者」、「改良主義者」として国民党政権との共存を図ったが、五〇年代の「白色テロ」によって多くの原住民が処刑されていく運命をたどった本章は、本書の中でも最も読み応えのある一章となっている。「エピソード」では、タイヤル族を「外族」、「異民族」とみた清朝、日本、国民党のどの政権に対する戦いも、タイヤル族にとっては「国家意識に基づくものではなく、狩猟地など自らの生活圏を脅かす「外族」に対するレジスタンスであった」という指摘は頷ける。それは「本質的に狩猟民族として

の山、森、林を守」ろうとする戦いであり、国民国家形成の原動力となったナシヨナリズムとは異質なものであったことが理解できよう。

### 本書の特色と感想

本書の特色は第一に、台湾原住民とりわけ北部タイヤル族について、植民地統治期以来主に民族学、人類学の領域で蓄積されてきた豊富な知見を生かしつつ、文字をもたない彼らの近現代史の空白部分を十数年来の精力的なインタビューで補い、文献資料も渉猟して歴史学の領域から照射したことであろう。とりわけ、植民地統治後半における原住民の過酷な運命について、これまで余り知られていなかった北部タイヤル族を中心に詳述され、その後の内戦期、五〇年代を経て文

小川陽一著

## 明清のおみくじと社会

— 関帝靈籤の全訳 —

中国生活に深くかわるおみくじ(靈籤)の入門的解説と関帝靈籤の全訳。明清社会、小説を読み解く鍵を提示。2700円

▼同じ著者による好評既刊

日用類書による明清小説の研究  
中国の肖像画文学

8738円  
2200円

町泉寿郎編・解題

## 柿村重松『松南雜草』

△最新刊▽

『本朝文粹註釈』の著者であり、日本漢文学研究に先駆的な業績をあげた柿村重松の遺稿『松南雜草』四冊の影印。三十年にわたって作られた漢詩文・和歌・論説・注釈・資料等をほぼ時代順に柿村自身が編修したもので、活字化されなかった諸作を収録した写本は貴重である。

近代日本漢学資料叢書2 A4判上製 8000円

研文出版 (税別)

東京・神田神保町2-7 ☎3261-9337  
http://www.kenbunshuppan.com/

革新期にいたるまでの全貌を俯瞰した意義は大きい。多くの読者は、北部タイヤル族の辿った歴史を通して、日本が台湾の植民地統治の中で、原住民の村々に、そこに住む人びとに何をもたらしたのか、台湾が「親目的」とされて自己満足してきた我々日本人の対台湾認識を相対化させる契機をつかむことであろう。

第二に、五〇年代の「白色テロ」の全体像を提示した研究はきわめて乏しかっただけに、原住民、北部タイヤル族の苦難の戦後史が具体的に明らかにされ、歴史の空白を埋める貴重な成果となった点があげられる。戦後、権力が日本から蒋介石政権へと移るなかで、二二八事件後、原住民の権利拡大と生存権の保障を求めて、蒋介石政権とも折り合いながら活動を続けた多くの原住民らが「共匪」とされ、「国家転覆」罪等の罪状で投獄、処刑されていった歴史が詳らかにされた。著者がインタビューしてきた関係者の足跡を知れば、その罪状の多くが冤罪であったことも理解できよう。民主化以降の原住民のエスニック・アイデンティティーにも繋がる問題であり、本省人と外省人の相克だけではない現代台湾のもう一つの亀裂、すなわち漢人と原住民との溝、その民族的重層構造を改めて認識させる一書となつていく。

最後に、感想めいたことを記しておきたい。著者が目指し

た歴史学と、民族学、人類学との結合という点でも、第一章や第三章を中心にそれら諸学の成果も取りこみながら本書を構成している点で、狙いどおりの一定の成果があったと評価できよう。ただ、日本側だけでも、歴史人類学などからの研究も含めて近年の台湾原住民研究の成果は実に豊富、多彩である<sup>(註)</sup>。それらに対する本書のアプローチは必ずしも充満とはいえない。今後、著者の研究をより意識的に繋げ、議論を共有していったならば、さらに学際的で実証的な研究が期待できる。今回、本書によって歴史学のサイドから民族学や人類学のフィールドにボールが投げ込まれた感があるが、今後双方で知のキャッチボールが行われていく可能性が拓けたといえよう。

また、この十数年来、朝鮮を中心に植民地収奪論と、植民地近代化論、その二項対立自体を批判的に見る「植民地近代性(Colonial Modernity)」論等が議論されている。台湾の原住民の場合はどうか。例えば顔面の入れ墨や「出草」の習慣の改善、狩猟生活から定住農耕生活への転換、著者自身も「日本統治の功績面」と記すマリアをなくすための蚊の撲滅、ダム建設・教育所の設営などの「近代化」諸政策、あるいは「植民地公共性」などの議論をどう評価したらいいのか、この著者ならどう語るか、知的な欲求をそそられる。

なお、本書のタイトルであるが、「台湾北部タイヤル族」の語意は、「台湾北部」に居住する「タイヤル族」なのか、タイヤル族のうちの北部に居住する「北部タイヤル族」なのか、一般読者の中には表紙カバーのタイトルの並び方を見て前者であると誤解する向きもあろう。

ともあれ、本書は蝟壺的な研究の弊に陥ることを自覚的に避け、専門的学知の社会的還元をも志した好著である。台湾原住民タイヤル族のことを知り、日本の植民地統治の内実、現代台湾との繋がりを考えることのできる恰好の書が出た。研究者はもとよりおおいに一般読者にも一読をすすめたい。

(注) 山路勝彦『台湾タイヤル族の二〇〇年』(風響社、二〇一二年)、松岡格『台湾原住民社会の地方化』(研文出版、二〇一二年)、松田京子『帝国の思考』(有志舎、二〇一四年)、日本順益台湾原住民研究会編『台湾原住民研究の射程』(風響社、二〇一四年)、及び同研究会編『台湾原住民研究』誌上での関連諸論文など。

(ほりい・こういちろう 日本大学)

『台湾映画二〇一七 特集 魏徳聖監督』

〈目次〉

・魏徳聖監督インタビュー 川瀬健一、翻訳・黄耀進  
 ・魏徳聖監督『52Hz, I Love You』インタビュー

川瀬健一、通訳・秋山珠子

・二〇一六年の台湾映画概況 稲見公仁子

・マンダレーへの道 浦川留

・金馬獎五〇年 聞天祥、翻訳・富田哲

・台湾映画を撮った日本人監督列伝(1) 山崎泉

・戦後、五年間に台湾で上映された映画と社会背景

一九四五(民国三四)年～一九四九(民国三八)年

川瀬健一

・わたしが台湾役者になった顛末(続) 林田未知生

・金馬獎と台北電影獎でつらつらと思う

～二〇一六年の台湾映画～ 杉山亮一



『台湾映画 2017』  
 A5判 150頁  
 東洋思想研究所  
 1,200円

\* 東方書店にて  
 取扱い中